

# LINEチャットの会話における感動詞「あ」の分析

## A Study of the Japanese Interjection “A” in LINE Conversation

楊 虹

YANG, Hong

キーワード：SNS, 認識の変化, 話題, 同期性, 相互行為

### 1. はじめに

デジタル機器の普及により、コミュニケーションのツールの一つとして、LINE等SNSを利用した文字チャットが広く利用されている。LINEチャットの会話は、書き言葉でありながら、話し言葉の要素が多く見られる（岡本 2016）。例えば、相づち、終助詞、くだけた表現、擬態語・擬声語、感情を表す感動詞などが挙げられる。本研究は、感動詞に注目し、中でも、話し手の感情や、評価的スタンスを示すものではなく、話し手内部の情報処理状態を表す感動詞「あ」<sup>1</sup>に焦点を当てたい。

音声会話において、話し手内部の情報処理状態を表す「あ」「え」などの感動詞は、急に何か思いついたことや、発話の内容についてなんらかの断絶があることを示し、それらによって、会話の方向性を具体的な内容を話す前に相手に知らせる機能を持つ（田窪・金水 1997）。音声会話に見られるこれら感動詞の機能は、同期の相互行為を前提としたものであり、すなわち会話の方向性をその場その場で互いに調整しながら進める際、発話する瞬間における発話者の情報処理の状態を表す感動詞により、相手が会話の方向性を認識しやすくなる。では、基本的に非同期状態にあるLINEチャットの場合でもこれらの感動詞は同じ役割を果たすのか。本研究では、こういった話し手内部の情報処理状態を示す感動詞「あ」に着目し、日本語母語話者同士の1対1のLINEチャットにおける使用を分析し、LINEチャットならではの役割について考察することを通して、LINEチャットという媒体を介したコミュニケーションの特徴の一端を明らかにする。

### 2. 先行研究

#### 2.1 LINE文字チャットの特徴

LINEチャット（以下ではLINEと略す場合がある）の場面特性について、PCメールやケータイメール等ほかの媒体と比較したものに岡本・服部（2016）、三宅（2019）、倉田（2018）等がある。本節では、これらの先行研究のLINEの会話と音声や対面の会話との比較に関する研究成果に絞って概観していく。

LINEの会話と音声会話の相違は、送受信のモードと同期性、記録性という3つの媒体特性の

1 本稿では、声門閉鎖を伴う「あっ」を異形態と捉え、表記の簡便化のため、「あ」で統一する。先行研究によっては「あっ」と表記する場合もある。

影響を受けることによると考えられる。まず送受信のモードについては、LINEは基本的に空間を共有しない者同士によるやり取りで、入力された文字や画像といった視覚情報が伝達されるため、音声（対面）会話の場合に伴う音韻的特徴や、表情、ジェスチャーなどのパラ言語・非言語情報の伝達は欠如する。LINEではそれらを補う手段として、記号類や行間などを用いて音韻的特徴を表現したり、絵文字や顔文字等で笑いを表現したりした工夫が見られる（岡本 2016, 森本 2016, 他）。

次に送受信の同期性については、同期的である音声会話と異なり、LINEは、ほぼ同期から非同期まで状況によりさまざまである（岡本・服部 2016）。倉田（2018）は、システムの同期性と応答の同期性に分けて考察し、LINEの会話では完全な同期にはならないと説明している。こういったシステムの特性により、LINEの会話には、非常に速い速度でやり取りされる場合に隣接ペアが隣り合わないということが起こり、複数の話題が同時並行的にやり取りされるという現象が見られる（西川・中村 2015, 三宅 2019, 倉田 2018, 他）。また、同期性に関連しての特性として、LINEには、既読表示という機能がある。送信した後に、相手がトーク画面を開いている場合には、送信者の画面にはほぼ同期的に「既読」が表示される。すなわち相手がメッセージを受け取ったことを瞬時に確認できるシステムである。

最後に記録性について触れる。記録性を持たない音声会話と大きく異なり、LINEでは、やり取りがログ画面に記録され、時間が経過してからでもさかのぼって確認することができる。そのため、話題の輻輳が問題なく遂行され、「非直後の相づち」を打つことが可能であり（倉田 2018）、また一旦途切れた会話がスムーズに再開されることもあるという（西川・中村 2015）。

以上、音声会話と比較して、LINEというメディアを用いた会話の特徴を概観してきた。LINEにおける感動詞については、「五感に訴えかける表現」や、「即効的表現」として触れられている（岡本 2016, p. 229）。本稿で取り上げる感動詞「あ」は、さまざまな即効的表現の一つとして位置づけられると考えられるが、それに焦点を当て、その機能を明らかにした研究は管見の限りない。

## 2.2 感動詞「あ」の機能について

感動詞「あ」を取り上げた先行研究に、森山（1996）、田窪（1992, 1995）、田窪・金水（1997）、富樫（2001, 2005）等がある。これらの研究は、「あ」のみに焦点を当てたものではなく、「あ」「え」などの類似した機能を持つ感動詞の比較・分析を通して、音声会話における感動詞の役割を解明してきた。そしてこれらの研究では、言及の仕方が異なるものの、「あ」は、新規情報の獲得・発見の際に発せられ、話し手の情報の処理状況を示す機能を持つといった指摘が共通して見られる。森山（1996, p. 56）は、「あ」は「新情報、新しい事態を受け入れる方向での最も未分化な遭遇反応として使われる」と述べている。田窪・金水（1997）は、「感動詞・応答詞は、外部からの言語的・非言語的入力があった時の話し手の内部の情報処理状態の現れと考え」（p. 261）、「あ」「はっ」等は、「自分で発見した情報を新規に登録する際の標識であ」（p. 268）り、「予期されていなかったにも関わらず関連性の高い情報の存在を新規に登録した」（pp. 268-269）ことを

## LINE チャットの会話における感動詞「あ」の分析

表していると指摘している。富樫 (2001) では、「あ」系、「ふーん」系、「はい」系と3つの形式に分類したより詳細な分析が行われている。富樫 (2001) の分析から、単純に情報の獲得を示し、話し手の評価的ニュアンスを伴わない感動詞は「あ」のみであると考えられる。

富樫 (2005) は、感動詞の機能を、その伝達の側面を排除した分析の必要性を主張し、「あっ」と「わっ」の比較を通して、「あ」の機能は、話し手の「変化点の認識を示す」ことにあると指摘している。富樫 (2005) は「あっ」の本質は、「発見」「新規情報の登録」を示すものではなく、「そういった、何が新しく何が古いのかといった処理操作以前の何か（心内で）変化したことのみを示す」と指摘している(p. 244)。この指摘は、日本語と中国語の感動詞を比較するために感動詞の機能を分類した楊・中川 (2014) の指摘に通じる。楊・中川 (2014) では、「あ」の機能を「話し手の認識の変化を示す」としている。

一方、自然会話における「あ」の伝達の機能を文脈に即して観察し分析した大塚 (2020) は、「あ」に続く発話文全体の発話機能の分析を通して、「あ」の会話展開上の機能について、「あ」は「あ」に後続する発話は、①関連している新たな情報を提供することをマークする、②相手のフェイスへの配慮が必要な内容であることを話し手が意識していることをマークする、③発話の扱い方が変更されることをマークする、と挙げている。これらのうち、③は相づちなどの注目表示に関する発話機能である。大塚 (2020) では、「あ」は、相手の発話の発生を変化点として認知し、それにより話し手と聞き手との間に注意や感情の共有が生まれるという共同主観的な会話展開につながり、自然会話において、情報伝達に関する配慮やボライトネスにかかわる機能を持つと指摘している。

大塚 (2020) では、認識の変化を示す「あ」の生起する情報源を「相手の発話の発生」に限定し、また「関連している新たな情報」としているが、「発見」「思い出し」等、「あ」の生起が相手の発話によらない場合も考えられる。また楊 (2005, 2006) は、大きな話題転換部における話題開始表現として「あ」が用いられていると報告している。話題転換における話題開始部に見られる「結束性表示行動」の一つとしての「認識の変化を示すことば」(村上・熊取谷 1995)、または談話標識 (木暮 2002, 田中 2018, 朱 2020) として、「あ」が挙げられている。「あ」は、目下の会話に関連しない事柄の入力による「認識の変化」の標識となりうるのか、検証する必要があると考えられる。

以上のように自然会話において、「あ」は、相づち表現や、新規話題の開始、新しい情報の提供または情報要求への応答への先導として用いられることが指摘されている。そして、会話という相互行為において、その「認識の変化」をもたらした情報源は、直前の相手の発話という言語的入力の場合もあれば、外部環境などへの言及<sup>2</sup>といった非言語的入力も考えられる。また「思い出し」といった話し手の内部からの「情報入力」の場合も考えられる。いずれの場合でも、聞き手が「あ」によって、「今・ここ」という瞬間に話し手になんらかの認識の変化をもたらしたものがあつた、それによって導かれた発話が「非計画的」であると解釈できる。これが、「会話

2 例えば、「あ、飛行機だ」のような発話である。

の大体の方向性を具体的な内容を持つ発話がなされる前に察知することができる」(田窪・金水 1997) ことにつながり、また「あ」の「情報伝達に関する配慮やポライトネスにかかわる機能」(大塚 2020) につながると捉えることができよう。

以上で取り上げた研究はすべて、音声での発話における「あ」の機能である。LINEの会話における感動詞「あ」への言及は、管見の限りない。2.1で概観したように、LINEでは、話題の輻輳や相づちの送信方法の調整等、媒体の特性の影響を受け、音声会話と異なる会話の様相が見られる。音声会話では、話題転換または情報提供の発話の先導としての「あ」は、話し手の発話する瞬間の情報処理の状態、言い換えれば認識の変化点を相手に示し、「先読みに対する情報を与えてくれる」(田窪 2005, p.21) ため、会話における相互行為のリソースとして利用される。一方で、書記言語で非同期的なやり取りが多いLINEにおいては、その場で相手がメッセージを見るとは限らず、とりわけ非言語的入力、すなわち相手の直前の発話でない情報源による場合には、「あ」は、どのような役割を果たすのだろうか。そこで、本研究では、相手の直前の発話への反応ではない「あ」に焦点を当てて分析し、LINEの会話における機能を明らかにしたい。

### 3. 研究目的と方法

#### 3.1 本研究の目的と課題

本研究では、LINEチャットの会話における感動詞「あ」の役割を探索的に分析し、LINEという媒体の特性を踏まえて考察を行い、LINEコミュニケーションの特徴の一端の解明を目指す。具体的には、以下2つの課題を設け分析する。

課題1 「あ」は、先行話題と関連しない発話の導入に用いられるか。

課題2 「あ」は、同期性の高い会話において生起する傾向はあるか。

#### 3.2 データ

データは、日本語母語話者による1対1の友人同士のLINEチャットの会話履歴20組である<sup>3</sup>。参加者は学生(大学、短大、専門学校)または社会人で、全員女性であり、年齢は19歳から25歳までである。協力者に直近からさかのぼり300送信分以上のチャット履歴の提供を依頼し、収集した。データはすべて自然会話であり、会話の状況や、話題のコントロール等は一切行っていない。データの収集時期は、2016～2018年である。

#### 3.3 分析方法

まずは分析対象とする「あ」の認定を行った。認識の変化を示す「あ」は、短い1モーラで発されるものであり、声門閉鎖音「っ」を伴って発音される場合もある。LINEの会話において、音声を文字で表現する際に記号類の使用が多く見られ、「あ」に後続する記号としては、「!」

3 本研究のデータは、収集方法等について研究倫理審査を受けており、個人情報に関しても細心の注意を払っている。また、協力者全員にデータ提出時に書面にて承諾書を提出してもらった。

## LINE チャットの会話における感動詞「あ」の分析

と「～」が見られる。「！」は、音声の強さを示すもので、「あ」に付加される場合、モーラ数が変わらず1モーラとみなし、対象とするが、音の引き延ばしと解釈されやすい「～」を付加する「あ～」は、2モーラの「あー」とみなし（岡本 2016）、対象外とする。また、話し手の認識の変化は、①相手の直前の発話による入力、②外部環境からの入力、③自ら想起したことなど話し手の内部からの入力と大別して3つの要因が考えられるが、本研究では、①相手の直前の発話による入力は「応答・相づち」の場合が多いため、分析対象から除外する。

課題1 隣接する2つの話題の間のつながり方については、南（1981）、楊（2005）の定義に基づき、「あ」を伴う発話が直前の話題または発話と関連がある場合を「話題継続」とし、関連がない場合を「話題断絶」として、分析する。

課題2 については、「あ」が生起する場面の同期性を調べるため、「あ」の送信時間と相手による最終先行発話との間の時間差を分析する。相手の最終発話と「あ」または「あ」を伴う発話の間に「あ」送信者による送信をはさむ場合、「あ」送信者による挟まれた最初の送信と相手の最終送信の間の時間差を分析する。例えば、後掲の会話例1の場合、5行目に「あ」が生起しているが、順番交替の1行目と2行目の時間差を分析する。なお、LINEログ画面では送信時間は分単位で表示されるため、同じ時間で表示される場合は0分とする。

最後に、以上2つの課題の分析結果を踏まえ、話題のつながり方別の同期性の傾向を分析したうえで、談話・会話分析の方法を援用して会話を質的に分析し、考察する。

## 4. 結果

### 4.1 話題のつながり方について

20組の会話のうち、18組に、計62の「あ」が見られた。個人差が見られたものの、LINEでは、「あ」が用いられることがわかった。話題のつながり方について分析した結果、話題継続が47であるのに対し、話題断絶は15である。音声会話で見られた関連性のない話題導入に「あ」が用いられることはLINEでも見られた。

### 4.2 生起する場面の同期性について

「あ」送信時のやり取りの同期性について、先行する相手の最終送信と「あ」の送信者の送信との間の間隔を分析した結果、時間の間隔は、同じ時間表示すなわち1分未満のものから、4日間近くかかるものまで、さまざまである。

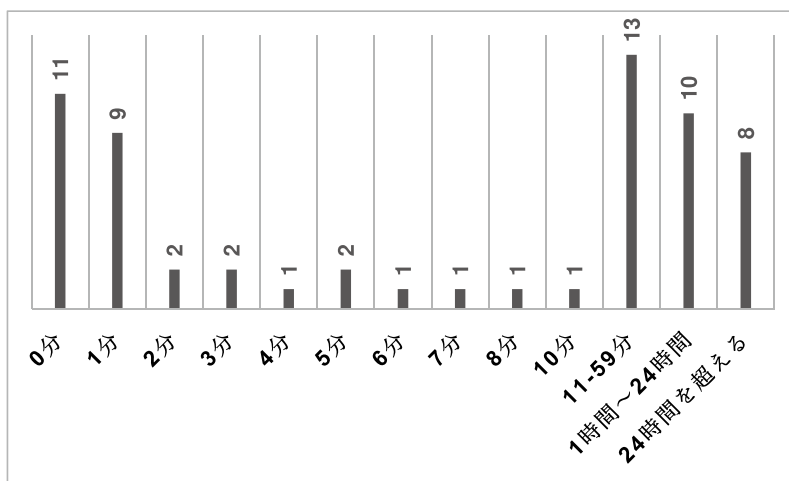


図1 「あ」送信時のやり取りの同期性

図1は「あ」送信時のやり取りの同期性の程度を示したものである。11分以上1時間未満のもの、1時間以上24時間までのもの、24時間を超えるものをそれぞれ1つにまとめて示している。生起する場面の同期性について、0-1分のは、比較的同期性が高いと考え、「同期性高」とする。2分以上10分までのものは相対的に同期性が下がり、11-59分のは同期性がさらに低いと考えられ、これらを「同期性中・低」とする。残りの1時間を超えるものは全て「非同期」とする。以上のように、図1の結果を3つのカテゴリーに分けたものを表1に示す。

表1 やり取りの同期性

同期性	同期性高	同期性中・低	非同期	合計
生起数 (割合)	20 (32%)	24 (39%)	18 (29%)	62 (100%)

表1をみると、「同期性高」が32%を占める一方で、「非同期」も29%を占め、一定数あることがわかる。そして、最も高い割合(39%)を占めるのは、中間にある「同期性中・低」である。以上を見ると、「あ」の生起環境については、同期性の高いやり取りに生起しやすいという傾向は見られず、さまざまな場面で生起していることが明らかになった。

以下では、話題のつながり方別の同期性の傾向について分析した結果を見る。

#### 4.3 話題のつながり方と同期性の傾向

同期性によって話題のつながり方に違いが見られるかについて、話題継続と話題断絶という2つの場面それぞれの同期性を示す各カテゴリーの割合を分析したものを表2に示す。

## LINE チャットの会話における感動詞「あ」の分析

表2を見ると、先行話題と関連のある発話を導入する話題継続の場合は、「同期性高」が高い割合を占める。一方で、「非同期」の割合も26%と、極端に低いとは言えない。また、先行話題と関連のない発話を導入する話題断絶の場合は、「同期性高」の割合が低く、「同期性中・低」が最も多かったが、「非同期」も40%を占める。LINEの会話の開始部と終結部を分析した船戸ら（2017）は、「最後のメッセージが送信されてから1時間の空白があり、かつ話題が変わっている」箇所を会話の区切りとしているが、その定義を援用すれば、話題断絶のうち、40%は会話そのものが終了した後に、会話を再開する箇所において生じたものとみなすことができる。

表2 話題のつながり方と同期性の関連

	同期性高	同期性中・低	非同期	計
話題継続	19 (40%)	16 (34%)	12 (26%)	47 (100%)
話題断絶	1 (7%)	8 (53%)	6 (40%)	15 (100%)

モバイルツールを用いたLINEの会話は、いつでもどこでも会話ができるという利点があると同時に、会話の参加者がいつでも即時に応答できる状況にあるとは限らない。そのため、応答までに時間がかかる要因は多種多様で特定するのが難しい。そこで、本研究では、同期性の違いがより顕著な「同期性高」と「非同期」にしばって、会話の同期性に応じた「あ」の役割を考察する。

## 5. 考察

### 5.1 話題継続場面における「あ」の使用の特徴

話題継続、すなわち「あ」を用いて現在の会話内容と関連のある事柄を導入するものは、62例中47例あり、大多数を占める。同期性の程度を見ると、4割が同期性が高い状況で用いられることがわかる。一方で、非同期も一定数を占める。本節では、具体例を挙げながら、「同期性高」と「非同期」という比較的差のある生起環境での「あ」の働きを考察する。

#### 5.1.1 「同期性高」の場合

同期性が高い場面における「あ」は、発話者の「今、現在」気づいたことを即時に相手に伝えることにより、参与者間に実時間の共有を示す役割を果たす。これは、LINEにおける「あ」の最も基本的な機能だと思われる。具体例を挙げて見ていく。

会話例1では、J21AとJ21Bは高校の同窓会の出欠に関する話し合いをしている場面である。二人はそれぞれ3組と2組の所属であり、互いに所属組のグループLINE上のやり取りを伝えている(1-3行目)。5行目でJ21Aは、「あ、コメントもきた」と、新規獲得した情報を「あ」を用いて、J21Bに伝えた。ここのコメントの送信者は3行目に出ていた〇〇子だと考えられる。3行目では「〇〇子スタンプきたけどみれないや」という形で、J21A側の状況を主節として、グルー

LINE上で獲得した情報を「けど」節で示している。それに対して、5行目での「コメントもきた」という新規情報は「あ」を用いて、今この瞬間に獲得したものとして、いわば実況中継のようにJ21Bに伝えている。同期性の高いやり取りにおいて、LINEにおける「あ」は、相手と実時間の共有を示す標識としての役割を果たしているのではないかと推察される。

会話例1

- |    |       |      |                                |
|----|-------|------|--------------------------------|
| 1  | 23:47 | J21B | 本当だー！<br>ちなみに2組のLINEはとっても静かだよ！ |
| 2  | 23:48 | J21A | 嵐の前の静けさか                       |
| 3  | 23:48 | J21A | 〇〇子スタンプきたけどみれないや               |
| 4  | 23:48 | J21A | [スタンプ]                         |
| →5 | 23:49 | J21A | あ、コメントもきた                      |
| 6  | 23:49 | J21B | おお                             |
| 7  | 23:49 | J21A | 未読スルーでのりきろう                    |
| 8  | 23:49 | J21A | 今日のところは笑                       |

会話例1では、「あ」は、送信者の認識の変化を即時的に伝え、参与者間の時間の共有を示し、その結果会話の臨場感を高める役割を見てきたが、次に取り上げる会話例2では、単独で送信される「あ」は、LINEの会話の順番交替における順番維持の装置としての役割を果たすと思われる。

認識の変化を示す「あ」は、発話者が発話の瞬間に何らか情報の入力があったことを示す。そして、その「何か」は「あ」に続く発話で相手に伝えられることが予測される。本研究で見られた認識の変化を示す「あ」は、多くの場合、実質的発話を伴って送信される。すなわち、「認識の変化があったこと+認識の変化の中身」がひとまとまりで相手に伝わる。しかし、同期性の高いやり取りでは、「あ」とそれに続く内容を入力している間に、相手からメッセージが送信され、そのため、会話の流れが複雑になる場合もありうる。これは完全な同期にならないというLINEというメディアの特性に起因する問題である。音声会話では、仮に「あ」と言ったきりで口をつぐむ場合、相手は「何?」「どうした?」と聞く体制を取る。LINEの場合でも、単独で送信される「あ」によって、送信者の「今気づいたことがある」という認識の変化があったことが、最も早いタイミングで相手に伝わり、「今大事なことに気づいた。聞いてほしい」というメッセージが即座に相手に伝わる。「あ」を受信した相手は、次のメッセージを受信する、いわば「聞く」体制を取る。次に挙げる会話例2を見ながら、「あ」の順番維持の働きを考察していく。

会話例2では、1行目から7行目まで7つの送信が1分間のうちに行われ、きわめて同期性の高いやり取りが行われている。J27AとJ27Bは、フィンランドに留学中である。会話の冒頭でJ27AはJ27Bに誘いのメッセージを送る(2行目)。共通の友人〇からの誘いという形での誘い



LINE チャットの会話における感動詞「あ」の分析

である。それに対して、J27Bからは、誘いへの応答ではなく、「今日？」という確認要求が送信される。J27Aは「そう」と確認を与えた後、「あ」を送信した（5行目）。この「あ」に続いて、「ヘルシンキ何時いくの？」（6行目）という質問を送信した。ここでは、J27Aは「あ」を用いて、自らの認識になんらかの変化があったことを相手に示した。それを受信した相手は、その認識の変化の中身を「聞く」体制を取る。

会話例2

1	20:27	J27A	[画像]	
2	20:27	J27A	○がこれ一緒にいくかって、6時から	
3	20:27	J27B	今日？	} 挿入連鎖F } 挿入連鎖S
4	20:27	J27A	そう	
→5	20:27	J27A	あ	
6	20:27	J27A	ヘルシンキ何時にいくの？	
7	20:27	J27B	なう！	
8	20:28	J27A	ヘルシンキなう？	
9	20:28	J27B	朝5時に出たよ！	
10	20:28	J27A	え！笑	
11	20:28	J27B	え！笑	

誘いの連鎖という観点から会話例2の流れを改めて確認する。2行目でJ27AはJ27Bを誘うことによって連鎖を開始している。この誘いに対して、J27Bは「今日？」という確認要求を送信する。この確認要求は、誘いの連鎖の応答（隣接ペアの第二部分）部分を即座に産出できないことを示し、誘いの連鎖における挿入連鎖の第一部分にあたる。それに対し、J27Aは「そう」と確認をし、挿入連鎖を閉じる。この次に来る順番においては、誘いの連鎖の第二部分、すなわちJ27Bによる受諾や断り、あるいは第二の挿入連鎖の開始などの反応が予測される。しかし、ここで、J27Aによる「あ」が送信された。この「あ」は、実質的な発話を伴わず単独で送信されることによって、J27Aには「今気づいたことがある」ということを最も早いタイミングでJ27Bに伝えることができた。誘いを開始したJ27Aが挿入連鎖を閉じた後、相手の応答を受ける前に何か気づいたことがあるというメッセージを送ることにより、J27Bに「今関連する何かに気づいた。ちょっと聞いて」と合図する役割を果たしたと推測される。実際J27Aから「あ」を先導とした質問「ヘルシンキ何時にいくの？」が送信されるまで、J27Bは、メッセージを送信せず、「何時にいくの？」に対する返答である「なう」を送信することで、間接的に誘いへの不受諾を相手に伝える。このようにLINEでは、単独で送信される「あ」は、同期性の高いやり取りにおいて、発話順番を維持する装置として利用可能であることが観察された。また、この場面の特性について次のようにも考えられる。「断り」は典型的なFTA（相手のフェイスを脅かす行為）の一つ

であり (Brown&Levinson1987), 「関係維持と意図の伝達の両方に配慮が求められる言語行動」 (尾崎 2006) である。この場面では, J27Bは, J27Aの質問「ヘルシンキ何時にいくの?」に応答する形で, 誘いへの断りの「理由説明」として理解可能な応答を行った。ここでは, J27Aがいち早く認識の変化があったことを伝え, 順番を保持した結果, J27Bから断りの「理由説明」を引き出したため, 人間関係の維持に寄与する「断り」の会話展開が相互行為的に実現できた。

以上では, 同期性が高い場面における「あ」の果たす役割を見てきた。「あ」は, 参与者間の時間の共有を示し, 会話の臨場感を高めるだけでなく, 場面に応じた送信方法によって, LINEの会話における順番維持の装置としても利用可能であることが示唆された。

### 5.1.2 「非同期」の場合

非同期は, 直前の相手の送信が1時間以上前の場合であり, 会話の中断は場合によっては数日に及ぶ場合もある。「あ」を用いて, 会話が中断する前の話題に関連する発話を送信することにより, すばやく会話及び話題を再開する。非同期の場合では, 「あ」は, 会話のすばやく, スムーズな再開のリソースとして用いられる。

会話例3は, 2日間の中断後に「あ」を先導として会話が再開される例である。1-5行目は10月10日深夜のやり取りである。J22BはJ22Aに彼氏にカラオケに誘われたことについて相談をしている。J22Aのコメント(1-2行目)に対し, J22Bは, いったん受け止めてから「考える〜」(5行目)と結論を保留した。それに対してJ22Aは翌朝「考えろ考えろ一笑」とスタンプを送信した。この話題はここでいったん終了した。その2日後にJ22Bは, 「あ, ○○○海浜公園行って夜はカラオケいきました!」と相談した「カラオケデート」のことについて, 結果報告という形で会話を再開した。しかし, その次の発話は, 「てかさ, バイト辞めるときってどんなかんじだった?」(8行目)と異なる話題を導入した。「てかさ」は, 転換標識「てか」+間投詞「さ」であり, 「てか」は「というか」「っていうか」の縮約形である。談話標識「てか」は, 発話頭において, 先行発話の修復を先導するまたは先行発話と全く関係のない発話を導入する場合に用いられ(若松・細田 2003), 聞き手の注意を促す働きをする(田辺 2008)。「さ」は聞き手の注意を促す間投詞である。つまり, 8-9行目では, 会話が再開された直後に話題転換が行われた。ここでは, J22Bは「今この瞬間に関連したことに気づいた」ということを予告する標識「あ」をつけることにより, 前の話題と関連することを端的に示すことができ, 話題開始に関する説明的な前置き<sup>4</sup>がなくても, 中断前の会話に関連するメッセージを送ることによって, 2日間途絶えた会話及び話題が瞬時的に再開することができた。LINEログ画面上では, 2日間を跨いで一続きの会話が構成されている。そして, この8行目の発話を足掛かりに, 話題転換標識「てかさ」を用いた新たな話題導入が可能となる。このように「あ」は, 会話を瞬時に再開する役割を果たし, 会話がすばやく展開していくことを可能とした。この瞬時的な会話・話題再開における「あ」の働きは, LINEという記録性を持つ媒体の特性によるところが大きいと言える。

4 例えば, 「この間の〜だけど」等である。

## LINE チャットの会話における感動詞「あ」の分析

### 会話例 3

- |   |       |      |                               |
|---|-------|------|-------------------------------|
| 1 | 23:29 | J22A | まあ楽しいとは思いうし                   |
| 2 | 23:29 | J22A | 雰囲気流されたとしてもJ22Bが良いならって感じはする一笑 |
| 3 | 23:54 | J22B | そっか笑笑                         |
| 4 | 23:54 | J22B | 雰囲気はばっちりですよね～                 |
| 5 | 23:55 | J22B | 考える～                          |

2015/10/11 (日)

- |   |      |      |          |
|---|------|------|----------|
| 6 | 6:35 | J22A | 考える考える一笑 |
| 7 | 6:36 | J22A | [スタンプ]   |

2015/10/13 (火)

- |     |       |      |                            |
|-----|-------|------|----------------------------|
| → 8 | 13:48 | J22B | あ、〇〇〇海浜公園行って夜はカラオケいきました！   |
| 9   | 13:48 | J22B | てかさ、バイト辞めるときってどんなかんじだった？   |
| 10  | 13:57 | J22B | 挨拶いった？                     |
| 11  | 14:15 | J22A | お！たのしかったー？笑                |
| 12  | 14:16 | J22A | 店長にLINEして、制服返しにお店に行ったくらい！  |
| 13  | 14:16 | J22A | 無理に行く必要なければ行かなくてもいいんじゃないかな |

## 5.2 話題断絶場面における「あ」の使用の特徴

話題断絶の場面は 62 例中 15 例であり、頻繁に生起していないことがわかる。同期性の状況を見ると、「同期性中・低」と「非同期」で生起しやすく、「同期性高」は 1 例のみで、ほとんど生起しないことが明らかになった。

### 5.2.1 「同期性高」の場合

「同期性高」では話題断絶は 1 例しか見られず、同期性の高い場面では、急な話題転換を「あ」を用いて行う場合は少ないと言えよう。日本語母語話者は音声会話において、急な話題転換を避ける傾向があり、相づちや沈黙等が話題終了表示として用いられると指摘されている（楊 2005）。チャットの場合、会話のペースを落とし「間」を置くことによって急な話題転換を避けることができるため、高速なやり取りをする「同期性高」場面では、関連しない新規話題の導入はあまり見られないのではないかと推測される。そこで、本研究で唯一見られた同期性高の話題断絶は、例外的なものと考えられ、その例外（会話例 4）の分析を通して、LINE における「あ」の機能をより深く考察してみる。

会話例 4 では、J49A と J49B は、待ち合わせの場所に向かう途中、すなわち移動中にチャットをしている。8:00 から 8:02 という 3 分の間に 22 の送信があり、間断なく高速のやり取りが続けられている。J49A は寝坊して、遅れる予定である。到着の予定（1, 5, 15 行目）、純恋歌の歌（2, 4, 7 行目）、待ち合わせ場所の確認（3, 6 行目）と複数の話題が同時並行でやり取りされている。

9行目でJ49Bは「150円奢りな」とJ49Aに要求し、その後、「ジュースを買ってくれれば」と150円の代わりにジュースを奢ってもらうようメッセージを送る(14行目)。それに対し、J49Aはジュースのほうが高いと冗談を言う(16-17行目)。それに対して、J49Bから相手を見つけたことを知らせる「あ、いた」(18行目)が送信される。この「あ、いた」は、直前の発話及び話題(ジュースのほうが高い説)とは関連のない発話であるが、J49AとJ49Bの現実世界での行動である「待ち合わせ」に密に関わる発話である。一般に待ち合わせをする場合、相手に気づければ、即座に相手に知らせなければならない。J49Bが、「いた」ではなく、「あ、いた」によって、まさに今この瞬間に相手を見つけたことを示し、会話は、ジュースを奢るという「ふざけ・遊び」の話題から二人のいる場所という現実世界での行動に関わる話題へと切り替わった。それに対して、J49Aは、「わたしも」と即座に返信した<sup>5</sup>。そして、次のJ49Bによる「じわ?」「じわる」(20-21行目)<sup>6</sup>は、16、17行目のJ49Aの「ジュースのほうが高い説」に対するレスポンスであり、話題の同時進行は継続する。このように、同期性の極めて高いやり取りにおいて、話題断絶の場面に現れる「あ」は、遊びの場面と実際の行動の世界が交差して、話題が輻輳している場面における切り替えの装置としての働きを持つのではないかと推察される。

#### 会話例4

1	8:00	J49A	着いた?
2	8:00	J49B	まぶたのうららにおまえーがーいるー
3	8:00	J49A	オリジンでいいよね?
4	8:00	J49B	?
5	8:00	J49B	もうすぐ
6	8:00	J49B	うん!
7	8:00	J49A	それぞれ
8	8:00	J49A	やばい会えるのテンション上がってきた
9	8:00	J49B	150円奢りな
10	8:00	J49B	(笑)(笑)
11	8:01	J49A	分かりました☺
12	8:01	J49A	笑笑
13	8:01	J49B	☺
14	8:01	J49B	うそだよジュース買ってくれれば
15	8:01	J49B	もうつくやで
16	8:01	J49A	ジュースの方が高い説isある

5 19行目の「わたしも」の述語部分は、22行目の「みっけ」であり、この2行で1つの発話「わたしもみつけた」というメッセージを構成する。ここでは、相手の現実世界での行動への切り替えに対して、J49Aもすばやい反応を示すべく、分割送信をしていることが観察される。

6 「じわる」は誤入力である「じわ?」の修復と思われる。

## LINE チャットの会話における感動詞「あ」の分析

17	8:01	J49A	160 円
→ 18	8:02	J49B	あ, いた
19	8:02	J49A	わたしも
20	8:02	J49B	じわ?
21	8:02	J49B	じわる
22	8:02	J49A	みっけ

### 5.2.2 「非同期」の場合

「非同期」における話題断絶は、船戸ら (2017) の定義に従えば、会話そのものが終了したとみなせる場面である。会話再開後に見られる「あ」の生起位置には、2つのパターンが見られる。1つは、会話再開の冒頭で「あ」を用いた話題導入が行われる場合であり、もう1つは、会話再開の冒頭ではなく、再開した送信者が複数の送信を行い、相手からの返信が見られる前に、「あ」を用いて話題転換を行う場合である。

「あ」の基本的機能は、今この瞬間にある認識の変化点を相手に表示することである。会話の流れの中に生起する「あ」によって、発話者が「予期されていなかったにも関わらず関連性の高い情報の存在を新規に登録した」(田窪・金水 1997, pp.268-269)ということが示され、相手はその「あ」を続く発話の方向性の予測に利用することができる。しかし、新たな会話を立ち上げ、新規の話題を導入する「あ」は、今この瞬間に発話者になんらかの認識の変化があったことを示すことにより会話再開を理由付けすると同時に、会話の連続性を演出することができる。LINEの会話はいつでも再開できる(西川・中村 2015, 他)という指摘があるが、「あ」の使用によって、物理的(時間的, 内容的)な断絶が確実にあるものの、会話は一続きで連続していると受け取ることができる。このパターンにおける「あ」の使用には、LINEコミュニケーションにおける会話参加者の「常につながっているコミュニケーション」への志向が窺われる。

次に、会話を再開した送信者が複数の送信を行い、相手からの返信が見られる前に、「あ」を用いて話題転換を行う場合を見ていく。このパターンにおいては、書記言語であるLINEならではの「あ」の働きが見られた。以下では、会話例を示しながら詳しく検討していく。

会話例5では、J46Aはカナダに留学中で1か月後に帰国する予定であり、J46Bは日本におり、韓国に留学する予定である。抜粋部分の1日前のやり取りでは、J46Aは留学先カナダで知り合った韓国人留学生をJ46Bに紹介する話題が見られた後、アルバイトや帰国後の履修科目の組み方等、話題が次々と変わっていた。最後に2月18日20:50の時点でJ46AとJ46Bそれぞれによるスタンプの送信で、会話は終了した。そして、1日後にJ46AはJ46Bを呼びかけて会話を再開し、帰国後の専門分野に関する授業の選択の話をはじめた(1-3行目)。その直後に、「あ」を送信し、続いてJ46Bに紹介する韓国人の友達の話に話題転換した。J46Bのカカオトークの連絡先をJ46Aが韓国人の友人に送ることで二人をつなぐという話は前日にされていた。5行目の「カカオトークつながった?」は、その話の続きである。また「彼女めっちゃ喜んでた!」における彼女は

韓国人の友達を指し、続いて「いつか3人であえるねって」と韓国人の友達の発話を引用の形式で伝える。ここでは、「社会調査士になりたい」と「友人同士をつなぐ」という関連性を持たない2つの話題の間に単独で送信される「あ」が配置されている。この「あ」は、J46Aの発話時の認識の変化を示し、後続発話の導入理由が気づきであること（田中 2018）、また直前の会話と結束性が弱いこと（村上・熊取谷 1995）を示す。これは、音声会話の話題開始における「あ」の働きと同様のものであり、また本研究では同期性にかかわらず、生じた全ての「あ」に見られる基本的な機能だと捉えられる。一方でこの「あ」の基本的な機能と同時に、単独で送信される「あ」には、さらにLINEならではの働きも見られた。つまり、単独送信の「あ」は、視覚的に2つの話題を境界づける役割である。

この点について、5.1.1 で示した同期性の高いやり取りにおける単独送信の「あ」と比べてみたい。同期性の高いやり取りでは、基本的に関連性のある話題が導入され、境界付けの必要性が下がる。また、やり取りが高速に行われ、すばやい発話の受け継ぎに参与者の注意が注がれる。一方、会話例5のような非同期の場合、相手は複数の話題が一気に送信される画面を開き確認することが予想される。会話の様相は、メールでのやりとりにより近いと思われる。そこで2つの話題の間に配置される単独送信の「あ」は、メールにおける「空行」に類似した役割を持ち、話題間の視覚的な境界を作り、それによって相手は会話の流れをより理解しやすくなることが推察される。

#### 会話例5

2017/02/19 Sun

- |    |       |      |  |
|----|-------|------|--|
| 1  | 21:08 | J46A | J46B ー！<br>なんかわたしも社会調査士とりたいかもっておもった！<br>こっちきて移民とか文化とかやっぱりずっとテーマにしていきたいなって思って<br>なんか自分でデータとか出せるのすごい有利かもって |
| 2  | 21:09 | J46A | まあどこまでできるようになるかは自分次第だと思うけど笑  |
| 3  | 21:09 | J46A | 授業かんがえてみようかなっておもってる！   |
| →4 | 21:09 | J46A | あ  |
| 5  | 21:10 | J46A | カカオトークつながった？笑<br>彼女めっちゃ喜んでた！☺<br>いつか3人であえるねって！笑  |
| 6  | 21:54 | J46B | 一緒に授業受けよ！社会調査士用の   |
| 7  | 21:55 | J46B | つながってないな   |
| 8  | 21:55 | J46B | まだ   |
| 9  | 21:55 | J46B | 会えるよ！！   |
| 10 | 21:55 | J46B | 面白い  |

## 6. まとめ

本研究では、感動詞「あ」を、1.「あ」によって導入される話題と先行話題のつながり方、2.「あ」出現時の会話の同期性、という2つの観点から分析し、LINEにおける「あ」の機能を考察した。その結果、「あ」は、現在進行中の話題に関するなんらかの事柄を想起した際に用いられるものが最も多く見られた。発話者の「今、現在」の認知状態の変化を示し、会話の結束性を保持するという音声会話における「あ」の機能は、LINEでも見られた。基本的に完全な同期にならない、書記言語のLINEにおける「あ」の使用は、実時間の共有を志向したLINEコミュニケーションの参加者の会話のスタイルの現れと言える。また、LINEの会話では、入力に時間がかかり、完全な同期にならないため、一方が入力し送信の準備をしている間に相手から発話を送られる可能性があり、会話の流れが錯綜してしまう可能性が生まれる。本研究では、送信者はこの問題に対処するためにとる方策の一つに「あ」の単独送信であることが観察された。単独で送信される「あ」は、「今、現在」の認知状態が変化したことをいち早く相手に伝え、気づいた関連の事柄を送るための順番を維持するリソースとしての役割を果たす。さらに、会話中断後の会話再開の場合、「あ」の使用によって、再開前の話題に関連する事柄を導入するというを示すだけで、一旦終了した会話が結束性を維持しながら瞬時に再開される。これも記録性のあるLINEという媒体ならではの「機能」と言えよう。

次に、先行発話や話題と関連のない場面で「あ」を用いた話題導入については、同期性の高い場面ではほとんど生起しないことが明らかになった。例外と思われる会話を詳細に分析した結果、「あ」は話題のフレームの切り替えに利用されることが観察された。ただし、1例のみの分析で、今後の検証が待たれる。一方、非同期的なやり取りにおける「あ」は、関連性がある会話を演出しながら会話をすばやく再開する役割を果たす。そこからLINEの参加者の会話の連続性への志向が窺われ、「あ」の使用は、日本語母語話者（若者）の常につながっていることを志向するコミュニケーションスタイルの特徴の一端を示すものと捉えることができよう。また、非同期場面で見られた単独送信の「あ」は、視覚的に「話題を境界づける」という役割を果たしている。これは、書記言語であるLINEチャットの特徴を利用して、より分かりやすい会話への送信者の配慮を示す用いられ方と考えられる。

以上のように、LINEにおいて、感動詞「あ」は、チャットという「記録性のある」メディアの特性や、相互行為上の場面特性に応じて、会話上の様々なリソースとして、用いられていることが明らかになった。線条的に流れる音声会話でないLINEチャットだからこそ、単独で「あ」を送信することが可能であり、それによって、相互行為上の問題に対処したり、談話構成のわかりやすさへの目配りを示したりすることが可能であろう。

## 7. 今後の課題

本研究は、限られたデータを対象に、主に会話の質的分析を通して、LINEチャットにおける「あ」の機能を探索的に分析し、考察した。今後は、データを増やし、分析の精緻化を図りたい。また、自らの情報処理のプロセスを相手に共有することを通して、会話の臨場感を高め、会話の連続性を強く志向するという日本語母語話者の認識の変化を示す感動詞の使い方は、他言語母語話者にも共通して見られ、SNSチャットの普遍的な特徴であろうか。今後、他言語母語場面のデータと比較しながら、検証していきたい。

## 付 記

本研究は、科学研究費基盤研究 (C) 「LINEをプラットフォームとした多言語多文化社会におけるネットワーク構築」(平成28年度～30年度課題番号:16K02803 研究代表者:佐々木泰子) 及び科学研究費基盤研究 (C) 「SNS接触場面のチャットにおけるフレームのマルチモーダル会話分析」令和3年度～5年度課題番号:21K00619 研究代表者:楊虹) の助成を受けた研究である。

## 【参考文献】

- 大塚容子 (2020) 「自然会話における感動詞「あつ」の機能－日本語教育の観点から－」宇佐美まゆみ (編) 『日本語の自然会話分析BTSJコーパスから見たコミュニケーションの解明』くろしお出版, 139-160.
- 岡本能里子 (2016) 「雑談のビジュアルコミュニケーション－LINEチャットの分析を通して」村田和代・井出里咲子 (編) 『雑談の美学：言語研究からの再考』ひつじ書房, 213-236.
- 岡本能里子・服部圭子 (2017) 「LINEのビジュアルコミュニケーション－スタンプ機能に注目した相互行為分析を中心に－」柳町智治・岡田みさを (編) 『インタラクションと学習』ひつじ書房, 129-148.
- 尾崎喜光 (2006) 「第5章 依頼・勧めに対する断りにおける配慮の表現」独立行政法人国立国語研究所 『言語行動における「配慮」の諸相』くろしお出版, 89-114.
- 倉田芳弥 (2018) 「LINEチャットの会話における相づちの働き－『機能』及び談話管理を巡る方略的観点から－」『言語文化と日本語教育』53, 1-10.
- 木暮律子 (2002) 「日本語母語話者と日本語学習者の話題転換表現の使用について」『第二言語としての日本語の習得研究』5, 5-23.
- 朱怡潔 (2020) 「主導権の交替から見た話題開始の談話標識」『言語科学論集』24, 41-52.
- 田窪行則 (1992) 「談話管理の標識について」『文化言語学－その提言と建設』1097-1110.
- 田窪行則 (1995) 「音声言語の言語学的モデルをめざして－音声対話管理標識を中心に」『情報処理』36(2), 1020-1026.
- 田窪行則 (2005) 「感動詞の言語学的位置づけ (特集感動詞－未開拓の研究領域へ)」『言語』34(11), 14-21.



## LINE チャットの会話における感動詞「あ」の分析

- 田窪行則・金水敏 (1997) 「応答詞・感動詞の談話的機能」 音声文法研究会 (編) 『文法と音声』 くろしお出版, 257-278.
- 田中奈緒美 (2018) 「談話理解の視点から見た話題開始のための談話標識の分類」 『日本語教育』 170, 130-137.
- 田辺和子 (2008) 「“というか”の文法化に伴う音韻的变化の一考察—縮約形「てか」「つか」をめぐる—」 『明解日本語』 13, 55-63.
- 富樫純一 (2001) 「情報の獲得を示す談話標識について」 『筑波日本語研究』 6, 19-41.
- 富樫純一 (2005) 「驚きを伝えるということ」 串田秀也・定延利之・伝康晴 (編) 『活動としての文と発話』 ひつじ書房, 229-251.
- 西川勇佑・中村雅子 (2015) 「LINEコミュニケーションの特性の分析」 『東京都市大学横浜キャンパス情報メディアジャーナル』 16, 47-57.
- 船戸はるな・佐々木泰子・加納なおみ・楊虹・倉田芳弥 (2017) 「LINEにおける会話の開始・終結について」 第 52 回日本言語文化学会口頭発表要旨, 『言語文化と日本語教育』 52, 47-50.
- 南不二男 (1981) 「日常会話の話題の推移—松江テキストを資料として」 『藤原与一先生古希記念論集「方言学論叢」 I』 三省堂, 87-112.
- 三宅和子 (2019) 「LINEにおける『依頼』の談話的特徴を記述・分析する (1) —メディア特性とモバイル・ライフの反映を探る—」 『文学論藻』 93, 31-49.
- 村上恵・熊取谷哲夫 (1995) 「談話トピックの結束性と展開構造」 『表現研究』 62, 101-111.
- 森本祥一 (2016) 「メッセージングアプリの機能がコミュニケーションにおいて果たす役割に関する一考察」 『情報科学研究所所報』 86, 19-24.
- 森山卓郎 (1996) 「情動的感動詞考」 『語文』 65, 51-62.
- 楊虹 (2005) 「中日接触場面の話題転換—中国語母語話者に注目して」 『言語文化と日本語教育』 30, 31-40.
- 楊虹 (2006) 「日本語母語場面の会話に見られる話題開始表現」 『人間文化論叢』 8, 327-336.
- 楊虹・中川正之 (2014) 「中国語と日本語の感嘆表現」 『日中言語研究と日本語教育』 7, 50-60.
- 若松美記子・細田由利 (2003) 「相互行為・文法・予測可能性—『“というか”』の分析を例にして—」 『語用論研究』 5, 31-43.
- Brown, P. and S. Levinson (1987) *Politeness: Some Universals in Language usage*, Cambridge University Press.